

実施報告書

HT25157

【プログラム名】命を創る子宮とそれを脅かす病 ～どうしたら病気にならないか～



開催日：平成25年8月3日(土)  
平成25年8月4日(日)

実施機関：奈良県立医科大学  
(実施場所) (基礎医学棟 4階小講義室)

実施代表者：小林 浩  
(所属・職名) (医学部・教授)

受講生：高校生女性31名

関連URL：<http://www.naramed-u.ac.jp/~gvne>

【実施内容】

① プログラムの留意点および工夫点

主に奈良県内の女子高校生を対象に、最新の超音波診断装置を用いて子宮の中で発育するダミーの胎児を観察することにより、生命の尊さを学ぶための実習を企画しました。

1. 生命の誕生に重要な臓器である子宮および卵巣の生理と解剖に関する学習をするため、できるだけ視覚に訴えるよう絵を用いて説明し理解して頂くように工夫しました。

2. 妊娠中の胎児の状態を、赤ちゃんの動いている様子や成長の様子がよくわかる超音波画像を用いて紹介しました。更に、実際の超音波を用いて自分で体験してもらい、子宮の中のダミーの胎児を観察し、生命誕生やその神秘さに一層興味を持っていただけるよう努力しました。

3. 発がんの原因に関して学びました。特に20-30歳代の女性のがんで最も多い子宮頸がんについて、その原因や予防を学習しました。そして、大学の病理学実習で用いる顕微鏡を用いて、正常子宮頸部組織の癌化していく過程を実際の病理スライドにて観察しスケッチすることにより理解度を高めていただく努力をしました。

4. 本年度より定期接種となった子宮頸がん予防ワクチンに関してどの程度知識があるのか、また、この年代の女性が、今回の生命の尊さを学ぶことにより、胎児をはぐくむ子宮に対する個々の思いに変化が起こるかを知るために、講義と実習を受ける前と受けた後で、子宮頸がんに関するアンケート調査を行いました。なお、アンケート結果の取り扱いについては本プログラム内でのみ使用することとし、研究目的のプログラム実施とならないよう十分留意しました。

講義の中では、対話形式を取り入れ、積極的にプログラムに参加していただくように促しました。

実習は、一人の受講生に多くの実習体験時間が取れるように、2グループに分けて実施しました。また、顕微鏡の使用方法を参加者1-2名当たり1人の指導者がつくように実施分担者、協力者を配置しました。

② 当日のスケジュール

10:20-10:50 代表挨拶、自己紹介、オリエンテーション、科研費の説明、前半アンケート記入

10:50-11:20 講義1. 子宮および卵巣の解剖と生理機能

11:20-11:30 休憩

11:30-12:15 講義2. 妊娠中の赤ちゃんの超音波画像の供覧

12:15-14:30 昼食と休憩

14:30-15:00 講義3. 子宮がんの原因と予防

15:00-15:10 Coffee time

15:20-15:40 A or B

15:40-16:10 B or A

A: 超音波シミュレーション機器による胎児確認

B: 顕微鏡観察

16:10-16:20 後半アンケート記入

16:20-16:40 ディスカッション

16:40-17:20 未来博士号授与、代表挨拶

### ③ 実施の様子

受付の風景です。初めてくる場所なので女性による受付としました。母親と一緒に来られている参加者もおりました(左)。実施代表者の小林より開会の挨拶が行われています(右)。



講義1,2,3の風景です。参加者の皆さんが先生の話に熱心に耳を傾けております。



実習の風景です。楽しみながら真剣に取り組んでいる姿がわかります。



未来博士号授与式の風景と最終記念写真です。お疲れ様でした。



### ④ 事務局との協力体制(奈良県立医科大学法人企画部研究推進課)

1. 独立行政法人日本学術振興会との連絡調整、提出書類の確認・修正等をして下さいました。
2. 委託費の管理、支出報告書類の内容確認・提出をして下さいました。
3. 受講生を募集するため、近隣高校への呼びかけをして下さいました。
4. 奈良新聞へ募集記事を掲載する手続きをして下さいました。
5. 会場の準備と後片付け及び当日の運営のサポートをして下さいました。

### ⑤ 広報活動

1. 当教室のHPおよび同日開催された奈良県立医科大学オープンキャンパスのHPを活用しました。
2. 広報用ポスターを作成しました(受講生募集時のポスター参照)。
3. 奈良県内の高校の校長先生宛に、奈良県立医科大学オープンキャンパスの広報に同封し、ポスターと実施案内状を郵送しました。
4. 奈良県立医科大学近隣の高校数校に、3の郵送後、再度進学担当の先生宛に案内状とポスターを郵送し、生徒さんに出席して頂けるように呼び掛けました。
5. 新聞に当企画を紹介した記事を掲載しました(新聞掲載等報告書参照)。
6. 同日に他のプログラム(HT25158)も実施したため、連携して募集案内や参加申込の窓口を合同にするなど、可能な限り委託費の効率的な使用に努めました。

### ⑥ 安全配慮

1. 実習時の安全確保のため受講生5名に対して2人の割合で女性医師と女子学生をつけました。特に、顕微鏡実習時には参加者1-2名当たり1人の指導者がつくように実施分担者、協力者を配置しました。
2. 日中に行い暗くなる前に帰宅させました。
3. 受講生と実施協力者(医学生)を対象にレクリエーション保険に加入しました。

⑦ 今後の発展性、課題

本企画への出席者全員がアンケートの中の質問「女性における子宮の大切さに関して、企画後ご自身の心境に変化ありましたか」において、「子宮は以前自分が思っているより大切」と感じて頂けました。子宮の大切さを知って頂くことにより、各個人が子宮を失うような疾患(子宮頸がん)からいかに予防したらよいかが発見できたと思います。今回は高校2年生が主体(19/31=61%)であったためか、ワクチンを接種した人が23/31(74%)に達していました。しかしその動機は、親に勧められて接種した人が約半数と最も多かったです。また、本年度より定期接種にもなっている子宮頸がんワクチンを初めて知った人が5/31(16%)も存在したことは驚きでした。以上より、今回のプログラムのような啓発活動の重要性を実感しました。また、子宮頸がんやそのワクチンに対する知識は、能動的ではなく、親、テレビや高校から受動的に情報を得ていることも確認できました。そのため、予防法が確立している子宮頸がんの知識を普及するためには、高校にて家族(父母)も参加できる形式の講演会を実施する必要があると思われる。

今回、広報活動を熱心に行いましたが、2日目においては募集受講者数の定員割れがありました。(20名中14名の登録がありましたが、当日欠席者が2名いたため最終的には2日目の出席者は12名でした。)この原因としては、県内の各高校に広報活動を開始した時期が6月下旬と遅かったこと、2日目に奈良県内で高校生の吹奏楽の大会が存在したことなどが考えられました。対策として、広報活動開始時期が、学期末試験や夏休みに近い時期ではなく、もっと早い時期より積極的に実施すべきであると感じました。

【実施分担者】

大井 豪一	医学部・准教授
吉田 昭三	医学部・助教
成瀬 勝彦	医学部・助教
伊東 史学	医学部附属病院・診療助教
山田 有紀	医学部附属病院・医員
新納 恵美子	医学部附属病院・医員
御輿 久美子	女性研究者支援センター・特任教授
水野 文子	医学部・講師
岡本 希	医学部・講師

【実施協力者】                                8 名

【事務担当者】

村上 真也	法人企画部研究推進課・主査
-------	---------------